

白川静のことば  
《40》



金子都美絵・画

應（おう）・鷹（たか）  
應（おう）・鷹（たか）は「あたる」とよむ字で、もとは鷹とかか  
れていた字である。鷹は鷹（たか）という字と関係があるらしく、その字形  
中の隼（とじ）はあるいは鷹であるかも知れない。

『中国古代の民族』 講談社学術文庫 288

鷹は金文の字形によって考えると、司（し）（祠）の省略形と隼（とじ）に  
従う形で、鷹が神棚の戸の上に隼を据えた形であるのと、いくらか  
似たところがある。おそらく隼（とじ）を抱いて神意を問うというような形  
義の字であろう。それで金文には、神意によって与えられることを  
「大命を鷹受す（おうじゆ）」のようにいう。「大命に鷹（あつ）」というほどの意で、  
鷹とは胸でうけとめる意である。鷹声に従う鷹（おう）、鷹（おう）、鷹は、  
みな神意に感鷹のあること、その感鷹を確かめる方法に関する字で  
あると考えるとよい。それならば鷹とは、神の感鷹を確かめるための  
「うけひ狩り」のための鳥を示すものとみてよい。すなわち鷹狩り  
がその方法であった。

『文字道遥』 平凡社ライブラリー P129

